◇経済教室　ニッポン再興の時（下）＝建築家・東京大学教授　隈研吾　個人主義優先の近代に幕［原文提供不可］
◎日本経済新聞　２０１１年０８月１９日　朝刊◇２５面　見出し４段　写表

経済教室

ニッポン再興の時 >>下

個人主義優先の近代に幕

隈　研吾　建築家・東京大学教授

ポイント
- ○リスボン地震は建築や都市が変わる契機に
- ○震災や原発事故で建築の無力さが明らかに
- ○きずなつなぐ作業は地場産業復興にも寄与

文明とは何か。様々な定義の方法があるだろうが、災害から人類を守るために人類が発明した、対災害システムの別名が文明だと考えている。

言い方を変えれば、災害がなければ、神で十分だった。神によって人々は守られ、安心していられたのである。しかし、災害はその安心を打ち崩す。災害は、歴史の流れを大きく変化させるほどの決定的なインパクト、ダメージを人々の心に与える。その時、神に代わって、文明が必要になるのである。そして、その対災害システムの中核になってきたのが、建築という道具であった。

◇◇◇

ポルトガル・リスボン地震（1755年11月1日）とモダニズム建築の関連を考えているうちに、文明をそう定義したい誘惑にかられた。リスボン地震は、歴史のハンドルを90度切るほどの大きな災害であったといわれている。近代科学も、啓蒙主義も、フランス革命も、すべてこの災害の産物であったと考える人さえいる。

確かに災害はそれほどの全方位的インパクトを与える。リスボン地震は、神が人類を見捨てたのではないかと考えざるを得ないほどのショックを、人々に与えた。その絶望から近代科学や啓蒙思想が始まったのは、きわめて自然な流れである。しかし、中でも最も直接的に災害によって影響を受け、パラダイムシフトを強制的に迫られたのが、実は建築と都市計画の分野である。

なぜなら、災害によって生命の危機を感じた時、人々はまず建築に頼ろうとするからである。強く新しい建築・都市は、ダイレクトに確実に、生命の危機を遠ざけてくれる頼もしいものと感じられたに違いない。それと比較すれば、科学や思想は即効性がなく間接的で、その生命維持効果はわかりにくい。

災害から生命を守るために、まず強くて合理的な建築と都市が一刻も早く必要とされ、その建築・都市を実現するためのバックグラウンドとして、合理的な科学・思想・政治が順を追って必要とされた。これが、突然に神に見捨てられ、生命の危機にさらされた人間の、生物としての自然な反応であった。

きずな、つなぎ直しを

人間の変革、建築とともに

リスボン地震の後の歴史は、そう要約することもできる。まず18世紀末に、建築・都市計画に新しい動きが起きた。政治体制の変化（革命）や、近代科学の達成に先立って、まず新しい建築の絵が描かれはじめたのである。ヴィジョネール（幻視者）と総称されるフランスの一群の前衛建築家が、この新しい動きをリードして、新しい建築や都市のドローイングを描きまくったのである。

彼らの基本的スタンスは、まず既存の都市から離れることであった。その離れた場所を白い画用紙と見立てて、そこに絵が描かれたのである。多くの生命を危険にさらす既存都市から隔離された画用紙の上に建つ、自律した都市が、彼らの理想だった。そこは、今までの世界の建築を縛り、覆い尽くしていた様々な約束事、すなわち装飾を排除した、ツルツルとしてのっぺらぼうな建築であった。あらゆる意味で既存の拘束からの切断によって、災害から救われようというのが、リスボン後の世界を支配した空気だった。

もちろんこの種の積極的な絵がすぐに実現するわけではない。そのためには科学・思想・政治の諸条件の成熟が必要となってくるわけだが、それを待たずに例外的に実現したものもいくつかある。代表的なのは、王妃マリー・アントワネットが住んだ、ベルサイユ宮殿の庭の中に建てられたプチトリアノンという小さな住宅である。何が最大の動機であったかは諸説あるが、彼女は異常な執念をもってしてベルサイユ宮殿から隔離され、切断された小住宅を欲しがった。その宮殿は装飾を排除したシンプルな外装で、逆に室内はロココ調の繊細で癒やし系のインテリアデザインで覆い尽くされていた。

プチトリアノンはある意味で20世紀の郊外住宅の先駆であった。リスボン地震がきっかけとなり、都市（大宮殿）から隔離された、単純な形の「白い箱」型建築で、災害から身を守りたいと人々は考え、行動し始めたのである。この大きな流れは、プチトリアノンから始まって、20世紀米国の典型的な風景となる、あの芝生の上の白い郊外住宅へと受け継がれていった。

◇◇◇

白いセーフティーボックスを獲得するため、人々は勤勉という習慣を獲得し、土地の私有制を洗練させ、住宅ローン制度を発明した。この箱をエンジンとして、工業社会が動き始め、資本主義経済はスムーズに回転を始めた。すべてがリスボンの災害から始まり、その流れの行き着いた先が20世紀の文明社会であった。

その20世紀流文明が崩壊する前兆は、すでに様々な形でわれわれを脅かしていた。例えば2005年のハリケーン・カトリーナは、米ニューオーリンズ市の「白い箱」に壊滅的打撃を与えた。08年のリーマン・ショックが、セーフティーボックスを担保とするサブプライムローン（信用力の低い個人向け住宅融資）の信用不安に端を発したことは偶然ではない。「白い箱」は物理的にも、経済的にも、少しもわれわれを守ってくれないということが様々な出来事を通じて明らかになった。リスボン地震が生んだ「夢」が、破綻を始めたのである。

そして、3月11日の東日本大震災はその無効性、無力を決定的にさらけ出した。都市から離れて建つ「白い箱」は、ピンポイントの都市型災害に対しては有効だったかもしれないが、面的な広がりを持つ津波に対しては全く無効であった。「白い箱」に住むわれわれは、地縁・血縁などのきずなをすでに喪失していて、「白い箱」同士をつなぐものはなく、箱が潰された後に再び支えあうすべはなかった。

単に「白い箱」というあり方が無力であっただけではない。建築という強い存在を頼りにして、災害から人間を守ろうというポストリスボンの建築依存型の思考回路が破綻したのである。合理的で強い建築をつくる目的のために、近代という時代は進化し続けたといっていい。しかし、いかに強い建築も、津波に耐えることはできなかった。人間がつくった強さも合理性も、自然の前では無力であった。

その後に起きた原子力発電所事故は、さらに建築の無力を証明した。放射線に対しては、津波に対して以上に、強く合理的な建築は無力であった。科学や技術を進歩させればさせるほど、箱（建築）が強くなるわけではなかった。まったく逆に、技術の進歩は箱を破壊する力を強大化させるだけであった。

放射線の話だけではない。地球温暖化をはじめとする地球環境の不安定化を通じて、文明の進歩は、箱を無力化し続けたのである。文明は箱を無力化し、無効化する方向に進歩し続けていたのである。

◇◇◇

ではいったい何が、われわれを守ってくれるのだろうか。きずなが鍵となることを、われわれは今回発見した。再びつなぐことしか、われわれを守ることができない。リスボン地震のあと、人々はあらゆるきずなを切って、きずなの代わりに「白い箱」で身体を守ろうとした。強い住宅（白い箱）で人間を守ろうとする考えは、家族を孤立させ、人々は箱の中で利己主義に傾斜していった。われわれは3・11の後、逆に、きずなによってしか、人間は守れないことを再発見している。IT（情報技術）という新しいきずなも、大きな力を見せつけた。

しかし、実はITよりもっと大きな力を持つきずなが、すでにわれわれのまわりにはたくさん埋もれていた。例えば人とのきずな、仲間とのきずな、そして大地とのきずな。自分を育ててくれた場所から離れて「白い箱」を築くのではなく、自分の場所と自分とをもう一度つなげてみたらどうだろうか。

そのつなぎ合う作業から、地場産業の復興が見えてくるかもしれない。場所に根の生えた新しい産業、新しいワークスタイルが生まれてくるかもしれない。場所を無視し、場所を殺す「白い箱」に頼るのはもうやめよう。場所と自分をつなぎ直す作業から、全く別の姿をした、やわらかく温かい建築と都市が生まれてくるかもしれない。

くま・けんご　54年生まれ。東大工学部大学院修了。90年隈研吾建築都市設計事務所設立

「白い箱」型建築の変遷

ベルサイユ宮殿プチトリアノン（1768年）[illegible]	装飾を排除したシンプルな外装の小住宅。ある意味で20世紀の郊外住宅の先駆け
サヴォア邸（フランス、ル・コルビュジエ設計、1931年）	モダニズム建築の代表作。「白い箱」は大地からも周囲からも完全に切り離されている
母の家（米国、ロバート・ヴェンチューリ設計、1964年）	ポストモダン建築の代表作。白さは脱したが、箱はなおも孤立している

※日本経済新聞社の許可を得て掲載しております。
無断で転載・複写することを禁じます。